
FORGOTTEN

est

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FORGOTTEN

【Nコード】

N5969G

【作者名】

est

【あらすじ】

それまでの価値観を打ち壊したベトナム戦争。かつてない挫折を味わった米国は、戦場から帰還した戦士たちを否定した。母国と故郷に否定された、とあるベトナム帰還兵が絶望の末に手を伸ばしたのは、僅かな至福とそれを遥かに上回る破滅を満たした注射器シリンジだった。『春・花小説企画』参加作品。

NOWHERE (1) (前書き)

本作品はフィクションです。 実在の人物・事件・団体・機関等との関係はございません。

NOWHERE (1)

——ヘロインだけが絶えない銃声を抑えてくれる、唯一の救い主だった。

1978年4月、ルイジアナ。

肌を灼く強い日差し／それでいて静けさを保つ街——あの忌まわしい日々を思わせるには十分すぎる不快な環境。

男——やつれた土気色の肌／浅黒く変色した注射痕／一見してわかる落伍者の様相「テイラー・ハリス——アメリカ陸軍の歩兵であつた男／哀れなベトナム帰還兵の典型的一例。

ベトナム帰還兵——多額の税金をつぎ込んだ殺戮の実行犯／近代戦を心得ているはずもないだろう東南アジアの原住民から勝利を勝ち得ることさえできなかった無能な男たち「アメリカの恥。

焦点を定めずただ虚空を見るだけの目／正義と自由のため、何よりも祖国のために戦った者の末路／言葉にすらならないうわ言を呟き続ける。

地獄という言葉すら生ぬるい激戦／分隊の仲間が目の前で《損耗》していく日常／共産主義者が作つたAKの模造品に腹を撃ち抜かれて腸をぶち撒けた戦友の最期が再生。フラッシュバック

密林に潜むベトコンを撃ち殺し、貧弱な武装で楯突く原住民を撃ち殺し、通信と補給線を断たれて前線で孤立し、ゲリラどもと命がけで戦い、ようやく合流した友軍から受けたのは本国への撤退という屈辱的な命令だった。

帰国してからテイラーを待っていたのはねぎらいの言葉でも温かい言葉でもなく、侮蔑の視線と罵倒の嵐だった。無辜の農民を撃ち

殺した悪魔として、獣にも劣る残虐な人間として、手厚い迫害を受けた。

姪っ子と同じくらいの女をベトコンを撃ち殺した光景が再生——
膝を撃ち抜かれて悲鳴を挙げのたうち回る芋虫のような姿／照準を頭に合わせて引き金を引く／肩口に軽い反動^{リコイル}／重くもなければ軽くもない奇妙な乾いた銃声／頭から灰白色のペーストを撒き散らかしてそれきり動かなくなる、子供の形をしたベトコン〓日常の風景。

最初に殺したのは誰だったかさえ覚えていない／正しく照準して引き金を引くだけで人は殺せる／死体を見てこみ上げる罪悪感を希釈するためにまた殺す・殺す・殺す／上官にお前は勇者だと絶賛される／一人殺すたびに自分を殺しているような奇妙な感覚。

「やあテイラー、気分はどう——って、聞ける雰囲気じゃないか。また薬かい？」

視界の端——ブロンドの短髪に青い瞳の男／エルボーパッチの付けられたジャケット・パイプステムシルエットのパンツ——総じて両親からの愛情を受けて育った中流以上のWASPの息子〓ロバート・ジョーンズ——大学に通う優等生／徴兵猶予によってあの日常を味わうことなく終戦を迎えることのできた幸運なアメリカ人の一人。

「そうだ、ロバート——テイラー。「これ以上に効く頭痛薬があれば教えてほしいくらいだ。——何の用だ？　女子供の背中を撃つた無様な敗残兵を、笑いに來たのか？」

「笑えるもんか。君は僕らのために最前線で戦って、こうして生きて帰ってきたんだ」

真っ直ぐに見据える目／嘘は言っていないとわかる目／泥と血と糞にまみれた帰還兵とはかけ離れた、とても綺麗な濁りのない目。
「間違ってるんだ、こんな状態は。選択権のない軍属の人間が国と国の思惑に振り回されて、それでも生きてこのルイジアナの地を踏みしめたと言うのに、君が手にしたのはほんの少しの年金とありつただけの罵声や差別なんだよ？」

お勉強のできる優等生らしい台詞——吐き気がする／偽善とも思えるほどに正しいロバートの言葉。

「——お前はその罵声を、止める方法が思い浮かぶのか？」——テイラー／頭の中を掻き回される様な不快感に酔いながらかつての友人に問う。

「正直に言えば、時間が経つのを待つしかない。ジョン・レノンやハノイ・ジェーンを平気で信奉するようなイカれた連中も、数年経てば頭が冷えてこの戦争が何だったのかを理解できる時が来ると、僕は思ってる」

「遅い、遅いなロバート。数年？ 五年か、十年か、それとも百年後の話しか？ 墓の下で腐った後に口でクソを垂れていた連中に感謝されるのを待てと言うのか？」

テイラー「さながら呼吸している死体のような無表情——辛うじて口元だけは薄笑いを浮かべているが、それだけだった。

ロバート「硬い表情——本心から親友の身と心を案じているが故の。

その友情を受け止められるただ一人の男「テイラー・ハリスは既に、あの密林で殺されたのだ。

密林という広大な密室特有は極度の緊張感を与え、彼の人間性を少しずつ削り取っていった。劣悪な衛生環境と銃弾は彼の仲間の命を奪ったが、その中でも彼は生き残った。故郷に帰りたい、恋人や両親や親友ともう一度会いたいという願いが、死の淵に首まで浸かっていた彼を引きずり出した。

ただ、彼を引きずり出したのは主でもなければ天使でもなく、他でもない悪魔だった。

ルイジアナ

公民権運動によって熱狂の坩堝と化した故郷。テイラーは帰るなり犯罪者のレッテルを貼られ、恋人とは音信不通となり、家族も彼を置いてどこかへと引っ越していた。彼に残されていたのは僅かな金と大きすぎる絶望だった。極限の状況下で磨耗しきった彼の精神は断末魔を挙げ始める。

フラッシュバックだ。視覚だけではない、頬を舐める密林の生温い風や銃声、そして血の臭い。どれもが現実となってテイラーの精神は容易く摩耗し、ほんの数週でヘロイン漬の脱落者が完成した。誇りとともにベトナムへと発った多くの兵士のうち、はたして何人かその誇りを失わずこの日を迎えたのだろうか——そんな勇者などいるはずはない、あの地獄を、凄惨な地獄を、目に焼き付けてまともでいられる人間などいるはずがない。

「帰れ。死体相手に話を持ち掛けるほど、お前は暇なのか？」——テイラー「目は決して合わせない／焦点を合わせることすら容易ではなくなったが故。

「……わかった、今日は戻る。けれど僕は諦めないよ?」

「俺はもう諦めた。——お前もじきにわかる。俺に向けられる言葉が、どれだけ無意味かということな」

テイラー「部屋から出ていこうとするロバートに目をくれることさえない／束の間の安息をもたらすだろう注射器^{シリンジ}をゆっくりと腕の静脈へ突き刺した。

Now Here (2)

無気力に染まった親友の姿を今日も確認したロバートは、静かに煮え立つ苛立ちを腹に抱えたままカフェに車を停めた。

店の中にそれほど客はいなかった。待ち合わせの相手はまだ来ていない。外からもよく見える窓際の席を選んでため息とともに腰を下ろす。

オーダーを取りに来たウェイトレスにコーヒーだけを頼んで、煙草に火をつけ窓の外を眺めてみる。肺を満たした紫煙を緩やかに吐き出しつつ、思案を巡らせていく。

……既に手遅れかもしれない。

それが親友に対するロバート・ジョーンズの印象だった。

講義の合間、顔を出せる時であれば常に顔を出すようにしていた。それでも、テイラーの顔は変わらない。むしろ、日に日に悪化しているようにさえ見える。

自分で自分のことを死体と言って薄く笑う。イージー・ライダースケールライフの真似をしてハーレーを乗り回し、学生生活を満喫していたのがほんの七、八年前なのだという事実がとても信じられなかった。今の彼は車の音や人の笑い声といった日常にさえ戦場の記憶を蘇らせる状態にあり、それを緩和するためにヘロインに手を出している。

ぎり、という音が歯を噛み締めた音だと、ロバートは少し遅れて気付いた。ただ扇動されるがままに平和を叫ぶ群衆に、彼らを何ら救おうともしない国家に、そして今も苦しんでいる親友を目の前にして何もできない自分の無力さに、腹の底から悔しさがこみ上げてくるのを、ロバートは感じていた。

乾き始めた喉を潤したい一心で傾けたコーヒーは既に冷めていた。泥水のような味だ。実際に泥の中を這いずり回り戦ったテイラーは、どんな気持ちだったのうだろう？

「……クソッ」

人目をはばからずに悪態をついたのは、これが初めてだったのかもしれない。そんなことを考える余裕もないほど、ロバートは憤っていた。何人かの視線が注がれていることさえ、どうだっていい。今も死にかけている友人に何もできない自分が、ただ、情けないだけだった。

来客を知らせるベルが鳴って、足音が近付いてきた。顔を上げれば、一人の女が立っていた。美人と呼んで差し支えないレベルの、整った容姿をした若い女だった。

ロレッタ・キングストン。子供のころからの付き合いで、派兵される直前にテイラーとは将来を誓い合った恋人だ。

「やっぱり、駄目だったの？」

「まだ諦めないさ。僕は昔っから諦めが悪くてね、それは君だって知っているだろ？」

行き場のない怒りに拳を硬く握り締めながら、ロバートはロレッタに笑いかけた。困ったように、そして悲しそうな笑顔でロレッタは小さく首を横に振る。

「もういいのロバート。テイラーの言う通り、テイラー・ハリスはベトナムで死んだのよ」

諦めであり、事実であつたのかもしれない。そしてそれは、恐らくは唯一残された最も賢い判断なのだろう。たった一年半の戦闘は、それだけで一人の人間を廃人へと仕立て上げた。躍動感に満ちた青い瞳も今は死んだ魚のように濁って、焦点が定まっているのかさえわからなかった。

目から熱い何かが溢れ出てくるのを誤魔化したい一心で、ロバートは目を伏せる。

そして、見た。

机の上に載せられたロレッタの左手——その薬指、まだ穏やかだった頃にテイラーが贈った誇らしげに輝いているはずの指輪が、消えていたのだ。

「……指輪、は？」

声は震えていた。驚愕と、それを遙かに凌ぐ怒りによって。

ロレッタがバッグから取り出したのは指輪のケースだった。そこにはロバートもよく目にしていたシンプルな婚約指輪がその役目を終え、納められていた。指輪だけは昔のまま、変わることなく輝いている。

みるみる歪んでいくロバートの表情を目にしてもロレッタの笑顔は止まなかった。ただただ静かに首を横に振り、静かに告げた。

「明日、直接テイラーに返そうと思ってるの。このままの状態を続けていたら、きっともう戻れなくなってしまう。そうなる前に決断しなきゃ」

言おうとしていることはわかっていた。諦めると、親友を見捨てると、さもないければ自分までもが同じ泥沼に引きずり込まれていくという忠告なのだ。

賢明な判断だ。もし自分が第三者なら間違いなく聞き入れるだろう忠告だろう。だが、その選択は親友を見殺しにするという残酷な選択だ。

出来るものか。そう、ロバートは思う。本来ならばその選択から一番遠かったはずのロレッタにそう決断させたこの現実には、沸き立つ怒りを押さえつける。

ベトナム戦争。共産圏の東南アジア進出を防ぐために繰り広げられた東西諸国の代理戦争。莫大な特需によって軍需企業は多大な利益を得た代わりに、戦闘の長期化によってアメリカ国内は世論が分裂し、反戦運動の激化は社会運動にもなった。公民権運動の鎮静化とともに終戦を迎えたが、アメリカの威信は大きく失われた。

アメリカの正義が、はるか東の小国に負けたのだ。共産諸国の後ろ盾があったといえ敗北は敗北であり、勝つことができなかった戦士と指揮官、そして政治家は文字通りの《戦犯》となった。

——もしも、ロバートが諦めたなら？

想像してみても頭を振った。^{かぶり}今ここで諦めることは、直接テイラーを殺すことに他ならないからだ。そんな判断を下せる冷静さを、ロ

バートは持っていない。たとえ持っていたとすれば投げ捨てていただろう。

皮肉と罵声は喉元まで出かかっていた。それを吐き出す寸前、ロレッタが静かに言葉を発した。

「——理不尽よね、とても」

理不尽。その一言で片付けられてしまうのだろうか。無数の不条理と矛盾が産んだこの状況を端的に表現したその言葉に、ロバートの怒りは更に煮え立っていく。

「あなたは正しい、間違つてなんかいないわロバート。けれどね、私はもう駄目。疲れてしまったの」

決して絶えることのない笑顔。だが、その笑顔は悲しげだった。止むことは、ない。

「正しいことを貫き通せる人はほんの少ししかない。私は貫き通せるほど強くなかったのよ」

「それで、指輪を渡してもう別れよう、それで終わりかい？」

「あなたは勘違いしているわ。これはもう、終わった話なのよ。誰がどれだけ望んだって、続くことなんかない。——明日、直接会って話すわ」

それだけ言つて、ロレッタはバッグを肩にかけ立ち上がった。要件は済ませたと言うように、だ。

そのままカフェを出ていくロレッタを止めることもなく、ロバートは大きなため息をついた。

もう終わった話なのだと、彼女は言った。だが、それは違う。結末に不満を思うなら違う結末を自分で書き込んでやればいい。昔のように、当り前な平穩に、幸せだったあの頃に戻れるというハッピーエンドを自分の手で書けばいいのだ。

筆は遅々として進まない。だが、筆を投げ出せば結末はそのままだ。自分から可能性を投げ出してしまうほど愚かな選択はないだろう。

「……僕は諦めない」

諦めてたまるものか。その思いだけを胸に、ロバートは冷めたコーヒーを飲み干した。

Nowhere (3)

朝——無意味な一日の始まりを告げる空の明るみ／細波のようにして絶えず引いては寄せる再生^{フラッシュバック}。既に日常の一部と化した苦痛。

散らかされた部屋／最低限の生活を送るための水・薬・適当な食物が散乱するリビング／生活感の希薄な一室。

閃光／銃声——怒号・すすり泣く声・喚き散らす戦友の断末魔／ある夏の日の思い出——血液に流れ込んでいくヘロインがほんの少しの幸福とともに記憶を薄めていく。^{フラッシュバック}

音——ベルの音。客の来訪を告げるもの／昨日の不愉快なひと時を思い出そうとする——思い出せない／ヘロインの酩酊が記憶を攪拌する。

「——こんにちは、テイラー・ハリス」

声——聴き慣れた、懐かしい、過去の声。ロレッタ・キングストン。

過去が襲ってくる——「帰ってきたら結婚しよう」というありふれたプロポーズ／女子供の背中を撃つ／はにかみながら、とびきりの笑顔を見せるガールフレンド／誰が敵か民間人かわからない状況／確かめあうようなキス／撃ち殺された死骸を見てこみ上げてきた何かを飲み干す——記憶の攪拌／耐えがたい頭痛。

駆け寄ってくるロレッタ——振り払おうとするがそれだけの力さえない／虚しく空を切る手。

視界の端——転がっているもの。丁寧なラッピングを施された鉢植え／可憐な小さく白い花卉をつけた花が見える。

「は、な……？」

僅かに引き始める頭痛／明瞭になっていく頭／蒼白になったロレッタを見たくない一心で顔をそむけ、膝をついたものの立ち上がる。

「大丈夫、大丈夫、だ、ロレッタ。目眩がただけだ」

自分に言い聞かせるようにして、大丈夫だと連呼する。幾度かの深呼吸で疼くこめかみの感覚を無視し、なんとか笑顔を作ってみる。「花を持ってきてくれたのか」

ロレッタ——わずかに俯いて、ええ、とだけ短く答える。明らかに戸惑いの色を顕わにしながら、それでもこちらの目を見て告げた。「……忘れな草よ。私のことも、ロバートのことも、昔のことを忘れないでほしいって思ってた。それで指輪も返そうと思ってた——」

忘れないでほしい——あまりにもささやかな、そして不可能な懇願だった。

忘れてしまうのだ。全ての記憶が加速度的に薄れていくのがわかる。

指輪と言うのは、自分が贈った婚約指輪のことだろう。忘れてしまふならばそんなことだってどうでもよくなってしまう。

だからこそ、テイラーは行動した。

乱雑に散らかされたテーブルの上、銀色に鈍く光る《それ》を手にとった。セーフティを外し、引鉄を引く。

銃声のあと、彼女の体は床へと転がった。頭から広がっていく赤い色——決して取り返しのつかない色彩——ロレッタ・キングストンという一人の人間が絶命した証でもある。表情は驚愕のまま固まり、目は見開かれていた。何故自分が撃たれたのか、理解できないという風に。

リリースボタンを押し込んで弾倉を確認する——薬室に装填されていた一発が発射されていた。残弾数は十発ノ《忘れられないようにする》ために予備の弾倉二つをポケットに入れる。

頭の中は冷え切っていた。やっていることはあの頃と変わらない。ただ、場所と相手と目的が変わっただけだ。目的が明確なぶん、今

回の方が冷静にすべきことをすることができるだろう。

クローゼットの中にあつた弾倉に弾をこめ、身なりを整えてティラーは車のキーを持ち外へ出た。

ロバートの通う大学へと到着／駐車場に車を停め、ジャケットのポケットに弾倉と銃を入れ、正門から入る。

春の風が頬を撫でた。心地いいという感覚は本当に久しぶりだった。きつと、これから起こることと自分のことを忘れる人など誰もいないだろう。

講義棟二階への階段を昇る。ティラーが講義を受けているだろう教室へと足を運ぶ。

扉の前に立つ。ドアはすでに開放されていた。ごく自然に歩いていくと、ロバートが驚きの表情とともに迎えてくれた。

「ティラー!？」

「ああ、そうだ、俺だよロバート。心配掛けたな」

なぜここまで来たのかという驚きと、自分で歩けるまでに回復したという回復の早さにロバートは驚いているようだった。

もつと驚かせてやりたい。その一心で、ティラーは銃を抜き――迷うことなく引鉄を引いた。

軽い音とともに赤い色が飛び散った。一瞬何が起きたかわからないという表情だったロバートが、苦悶の叫び声を挙げ、打たれた膝を抱え込んで虫けらのように転げ回った。

膝を撃ち抜いた。心配してくれたロレッタに一発しか弾を使えなかったのだ、ロバートは丁重にもてなさなければならぬ。一瞬でパニックになった教室を鎮めるため、すでに出入り口へと走っていた二人を頭を撃った。

「ギャラリーはあまり動くな。あなりたいなら止めはしない」

同じ赤色だ。同じ真紅の血が流れた。かつて自分を殺そうとした

ベトコンも、自分を迫害した故郷の人間も、自分を心から気にかけてくれた友人と恋人も。

一発あたり20セント。たったそれだけの金で人の心に残ることが出来る。これほどに素晴らしいことはない。きっと自分は人の心に残るだろう。

荒げた呼吸のままロバートが問う。顔色が悪い。

「な、んで、だ？」

「忘れてほしくないからに決まってるだろ」

もう二発、撃ち込む。悲鳴はない。肩と腹に一発ずつ。

「忘れな草を、ロレッタからもらった。忘れないでほしいって花言葉だそうだ」

「指輪、は、どうしたんだ？」

「関係ない。先にロレッタと待っていてくれ、俺もすぐ行くだろうから」

返事を聴くこともなく引鉄を引く／引く／弾倉に残された弾の全てを使う／返り血を浴びる。

硝煙と血の混じった臭い——これで湿り気さえあればあの密林と同じ状況／違うのは小銃ではなく拳銃を使っていること／場所が自分の故郷であること。

銃を奪おうと掴みかかってきた男／一歩引いて腹に蹴りを入れ、懐取りだした予備の弾倉を空弾倉と交換／眉間に一発。

次々と出入り口へ向かっていく／的へ向かって正確な弾道が走っていく／何人かが死体になって転がったのを確認して悠然とテイラーは教室を出て行った。

講義棟屋上——残りの弾は一発のみ／二十九発の弾で少なくとも十五人を死体にできた／軍属だった頃よりも素晴らしい戦果。

下が騒がしくなっていく／無数のパトカー／投降を訴えるけたた

ましい拡声器の声／数多くの人が自分を見てくれている／耐えがたいまでの欣喜。

胸ポケットからシガーケースを取り出して一服／ヘロインの多幸感こそないもも、苦味のある紫煙が心地良い。

フィルターまで煙草を楽しんで、ようやく警察が屋上へと詰めかけてきた。妙な動きをすれば撃ち殺すと語るような物々しさで、全員がこちらへと銃口を向ける。

一服している間に銃身が十分に冷えたのを確認して、ティラーは屋上入口へと振り向いた。

ティラー——銃を口にくわえる／金属の味／やめろ、という怒号とともに殺到する警官たち／引鉄に指をかける／セーフティは最初からかけていない。

恐らくは最期の再生——くだらない冗談を言ってふざけ合い、笑い合う自分とロバートとロレッタの姿〓決して忘れたくない記憶／そう遠くない過去に喪ったモノ。

自分は決して忘れない、ティラーはそう思う。だが、忘れてしまいかもしれない誰かのために、何かをする必要があった。それがこの行動の理由だった。

だが、すべて終わった。これならもつと装弾数の多い銃を使うか予備の弾倉を持つてくればよかったとも思うが、これくらいで幕を引くのが最善だろう。

笑いかける——走り寄ってくる警官に。

引鉄を、引いた。

青い空だけが視界に広がった。雲はない。ただ、青いだけだ。あの空は自分が味わった地獄にも続いているのだろうか？ 自分の愛した二人が待っているのだろうか？

頭から体へ伝っていくぬるい体温を感じながら、ティラー・ハリスは絶命した。

No Where (3) (後書き)

(。D) <ぼんじゅーる、e s tでございます。

(。D) <どうでしたでしょうか。訳がわからない、と思っていただけたら幸いです。

(。D) <題材にした花は忘れな草、花言葉は「私を忘れないで」ということで。

(。D) <体言止めとダシ、スラッシュなどの記号をこれでもかと乱発する文体ですが、これでまず多くの人に「読めない」と思っただけははずです。

(。D) <コンバットストレスというのは非常に深刻なもので、戦争の様式が様変わりし、塹壕戦が一般化したWW1にはシエルシヨックという新しいものが加わりました。最近ではイラク戦争での帰還兵が重度のPTSDに悩まされ、自殺する兵士も多いです。

(。D) <そのような極限状況の中、追い詰められた人間が何を思うのかと私が考えたとき、「誰かに覚えてもらいたい」という欲求が出るんじゃないかな？ という発想が今回の作品につながりました。

(。D) <加えて、誰にも理解されない帰還兵の内面を電文体で書いてみたのですが、結果は——ご覧の有様だよ、ということ。(笑)。

（。D）＜今回の執筆で聴いていたBGMはDo As In
finity「夜鷹の夢」、ぶっちゃけイマジンなんかよりよっぽ
どリアルでストレートに胸に届く反戦歌だと思います。

（。D）＜それでは、お目汚し失礼しました。

（。D）＜またどこかで会うことがありましたら、お会いしま
しょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5969g/>

FORGOTTEN

2010年10月8日15時29分発行